

---

# 参拝の旅

阿万之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

参拝の旅

### 【NZコード】

N4993Z

### 【作者名】

阿万之

### 【あらすじ】

西京の学舎の生徒である淨瑠璃は、一見勉学と恋に悩む普通の女生徒だった。今年は忌まわしき阿高山の参拝があり、そして八人の成員を求めているという話で学舎内は不安に包まれていた。そんなとき、淨瑠璃と友人の葵が成員の中に加わるということが決定された。絶望する淨瑠璃だが、成員の中には淨瑠璃の思い人がいた。かくして、八人の参拝の旅が始まった

## 登場人物紹介

### 阿高山参拝人達

燈籠

淨瑠璃

葵

百合桜

夏彦

八桐

音桂

初雁

霧窪

西条

四学年。女に手が早い

四学年。弓に長ける冷静な生徒

二学年。小柄で大人しい男子。雑学が豊富

富嶽学舎の生徒で燈籠の友人。

### 西京学舎の者達

陽炎  
葉摩子

淨瑠璃と同じ組のお調子者の女子。成績は悪い  
淨瑠璃と同じ組の不良っぽい女子

## 序

淨瑠璃は首飾りを持ち上げ、水晶玉を眺めた。水晶を擦りながら念じるとすぐに葵の顔が見えた。少し映りが悪いのは何故だろうか。葵は階下にいるだけなのに。葵がこちらに向かつて何か喋っているが、全く聞こえない。どうも磁界が乱れているようだ。顔を顰めて玉を下ろした。教室に戻るしかないと諦め、戻ると室内は何人かの生徒で賑わっていた。一人でいる生徒も水晶玉を使って通話をしている。窓の近くに座っている女生徒、雛菊は最近恋人ができるようでもいつも通話している。席につき、とりあえず机の中から書物を取り出し、捲った。勉学こそ生徒の本分。周りの喋り声が邪魔をして集中できないけど、あともう少しだ。時刻はすでに遅い。もう少しで寮に帰れる。ちらりと外を見る。窓の外は暗く、たなびく雲の中に隠れた月が朧に光っていた。

教師が入ってきた。退屈極まりない授業が始まる。そう思つたのは淨瑠璃ではなく、この教室にいる大多数がそうだった。

「さあ、授業を始めようか。さてさて、席に座りなさい」茶の着物を着た禿げかかった男が言った。男はいかにもどうでもよさそうに本を開き、そして咳をした。これがこの教師の授業を始める前の癖だと言うことは生徒全員が知っていた。

「さて、一昨日の続きをやろう。術の基本を学ぶんだ。さあ、早速百合桜、やつてくれ」

百合桜は最前列の女生徒で、優秀だったのでこの教師にかなり気に入られていた。百合桜は立ち上がり、凛として淡紅色の振袖の裾をはためかせて前に出た。

「何をすればいいんでしょう？」

「そうだな、幻視の術を使つてくれ。他の生徒たちの全員がわかるようにな

「わかりました」

百合桜は生徒達のほうを向くと、目を瞑つた。淨瑠璃は彼女の術が起ころるのを見守つた。百合桜の体から炎が躍り出てきた。そしてその炎は生徒を、教室を包み込んだ。何人かの生徒が悲鳴を上げて立ち上がつた。教室から逃げようとする生徒もいた。しかし、炎はすぐに消え、生徒はきよとんとした。服や皮膚を見ても焦げ痕すらない。教師は予想通りの反応だといわんばかりに意地の悪い微笑を浮かべていた。淨瑠璃も大多数の生徒と同じように炎の幻視に騙された。

「素晴らしいぞ、百合桜」褒められた百合桜は少し得意げな顔をしながら席についた。「次は陽炎。かけろう 体感幻視の術を使え」

体感幻視。眩惑させる術をさらに強め、実際には起こつていないことなのに起こつたように感じてしまう。例えば先ほどの百合桜の炎は誰も熱いとは思わなかつたし、自分の皮膚が焼けるとも思わない。しかし体感幻視だと実際に熱いと感じ皮膚が焼けたと思い込んでしまう。存在する幻、これが体感幻視だつた。淨瑠璃も含め生徒たちははどうにも信じられない思いで一斉に陽炎を見つめた。するとすぐに蜻蛉が体感幻視なぞできるはずがないということが理解できた。蜻蛉は呆けた顔で教師を凝視していた。当然だ。学年で最高の術使い百合桜ですらできない高度な術なのだ。基礎の術すらままならない陽炎が扱えるはずがない。淨瑠璃は少しほつとした。大体、そんな危険な術をこんな狭い教室でやるはずがない。

「冗談だ陽炎。そんな顔をするな」教師は意地の悪い笑みを浮かべて言った。周りの生徒の動搖も収まつた。「さあ、教科書を開きましたまえ」

授業内容は術の基礎を学ぶこと 基礎で落ちる高度なものだ。術というのは一部の人間のみが扱える高等学問だつた。心と体の一体化が必要で、初歩より上の術を扱えるのはこの中でもわずかしかいなかつた。

退屈な授業は終わり、生徒達は寮棟に向かつた。瞬時昇降する者

もいるし、あえて階段を下る者もいる。淨瑠璃は瞬時昇降することにした。五芒星の中心に立つと、星が光りだした。降りる間に勾玉を触った。多種の性能を持つ勾玉だが、淨瑠璃の勾玉は普通の役目を果たさなかつた。しかし、握ると不思議と心が穏やかになる気がした。葵はまだ教室にいるだろうか。階下に着くとそのまま廊下を進む。一人の男の生徒とすれ違つ。淨瑠璃はその生徒の一人を見る。すぐに顔を逸らした。そしてそそくさとその場を去つた。淨瑠璃はしばらく歩いた後に振り向いたが、もう一人の姿は見えなかつた。淨瑠璃は吐息をついた。頭から男子の顔が離れない。華奢にも見える纖細な体つき、端正な顔つき。その目に吸い寄せられそうになる。

「淨瑠璃」

気づくと隣に葵が立つていた。

「何してるの？」

「さあね」淨瑠璃はとぼけた。

「何よ？」

「あなたに会いにきたの」

「そう。じゃ、寮に戻ろつか」

二人は階段を下りて、一階にたどり着いた。それから門をくぐり、寮にたどり着く小道を歩いた。少し強く吹く風が心地よい。草むらからは蟋蟀や鈴虫の鳴く声が聞こえてきた。一人の他にも歩いているものがわざかにいたが、恋人同士がほとんどだつた。一人は嘆息した。

「ねえ、淨瑠璃。あなたは名家のお嬢さんでしょ。早いところ恋人作らないと、政略結婚に巻き込まれるよ」  
「私の家はそんなこと考えてないってば……葵だって、男のあてはあるの？」

葵ははぐらかした。「こんな美人が一人いて、放つて置かれるはずないでしょ」

「そうだといいけど」淨瑠璃は先ほどの男子生徒のことを思い、それから女子寮と池を挟んだ場所にある男子寮を見た。あの最上階で

彼は寝ているのだ。いや、まだ寝ていないだろう。今頃男子仲間とお喋りをしているに違いない。

「淨瑠璃？」葵の声に淨瑠璃は思わずはつとなつた。最近、少し想い人に対する考え方が多くなる。

「何？」

「あんたの好きな人は知ってるよ」

「誰のことかしら？」淨瑠璃はとぼけた。

「西条家のお坊ちゃん。名前は……何だっけ」

「燈籠」淨瑠璃は隠すのを諦めた。

葵は微笑を浮かべた。「そういう、燈籠。西条家の」

「何でわかつたの？」

「あのお坊ちゃんが通り過ぎるとき」、あなたが向ける熱い眼差しを見れば、ね」

淨瑠璃は少し恥ずかしくなつた。そして葵を睨んだ。

「そういう葵はどうなの、誰か好きな人いないの？」

「私はあなたほど家柄がいいわけじゃないし」

葵は珍しく寂しげな表情をし、淨瑠璃は気になつた。それから少し早歩きになつた。寮につくと一人はしばらく一階でお茶を飲み、談笑した。もう男の話はしなかつた。三階にいつて自分の部屋にいくと淨瑠璃は寂しくなつた。一人部屋というのは破格の待遇ではある。しかし葵とふたり部屋のほうがいい。いいに決まつてる。一人部屋なんて恨まれるだけで、いいことなんてありはしない。

高等学舎にきてもう三年。あと一年でここを出て、誰かの妻となるための準備をしなくてはならない。大抵の修行はもう終えているとはいって、淨瑠璃はここを出て見知らぬ男達と関りを持つということを考えたくなかつた。

布団に入つても眠れなかつた。起き上がり、窓の外を見た。向こうの男子寮が見える。淨瑠璃はため息をついた。恋焦がれていても、どうにもならないことがある。相手は最上級生だし、それに西条家とこの家柄だ。舎内で女と一緒にいる気配はないが、許婚もいるだ

るつ。淨瑠璃はもう一度ため息をついた。それからじぱりと窓の外の夜空の星を見上げた。

## 序二

万華鏡を見ると心が落ち着く。そういうものだ。燈籠はきらめりと輝く無数の鏡面を眺めた。美しい。星の瞬きのよつな、美しさ、そして奥深さを感じ、悦に浸る。しかしそろそろ飽きてきた。万華鏡を投げ、寝巻きに着替える。水晶玉が点滅している。赤と黄色と交互に光る。霧窪からだ。 燈籠の幼なじみであり、学問にも秀で、術にも長けたライバルもある。霧窪は都に一番近い学舎にいる。そのためか都からの情報が早い。

燈籠は水晶玉をして顔に近づけて応じた。辺りに微弱な結界が立ち込める。

「どうした？」

「よかつた。まだ起きてたか」水晶玉は透明になり、霧窪の顔が浮かんできた。霧窪とは幼馴染で、別の学舎に通っているとはいまだまだ友情は途絶えていなかつた。「実は来週の試練、俺が受けることになつたんだ」

「おめでとう」燈籠はつい微笑んで口に出した。本当に喜びべきことでは全くなかつた。

「ちつとも嬉しい」とじゃないね、桐窪の声は低かつた。「燈籠、君だつて不安なんだろ？」

「そりやあね。不安どころじゃない」

「そうだらうな。こつちもだ」霧窪はいかにも嫌そうな声で言つた。

「一体どうなると思つ? 今度の儀式は」

「さつぱりわからぬ」霧窪の顔が翳つている。おそらく不安になつてこちらに連絡をよこしたのだろうといふことが、燈籠にはすぐにつかつた。長い付き合いだつた。

「そつちはわかっているのか?」

「さあ。もしかしたら、死ぬかもしれないといふことだけしか」

「それはこつちもそつた。なあ、何で俺達は学生の途中なのに、そ

んな危険な目にあわないといけないんだろうね？」

霧窪の不満はもつともだと思う。しかし、そんなことを教師らや朝廷に言つ者はいない。忌まわしきものが背後にいるのだから。

「三年前は一人も死ななかつたよ」燈籠は言つ。

「四年前は一人死んだんだろ？」

「たまたま、崖に足を滑らせただけだ」

「魍魎に襲われたから滑つたんじゃないか」

「よく覚えていらっしゃる」これから試練の道を進む燈籠にとつては嫌な記録だつた。六年前には一人死んでいる。

十月三日。燈籠は壁紙の日付を確認した。今は九月の一十六日。もう少しだ。選抜に選ばれたはある意味で名誉なことなのかもしない。成功すれば英雄だ。しかしそれでも燈籠は選ばれたくないがつた。霧窪が言つたように、生徒をやつしているうちに死ぬのは御免だつた。学び舎を終えたら家に戻り政治のことを学ばねばならない。西条家の<sup>まつじょうけい</sup>人間というだけで政は避けられない。

「覚悟はいいか、霧窪。ところで君が何故選ばれたりしたんだい？」

「何を言つている。僕は富嶽で一番優秀な術士だぜ。そつちこそ、どうして選ばれたのさ」

「随分と自信じやないか」

「まあね。で、何故君が選ばれたんだい？」

「そりやあ、西京の成員のうち、誰か一人は賢者がいないといけないからさ。当然だろ？」

「わかつたよ。どつちみちこんなのは無作為に決まるんだろ」霧窪は笑つた。少しは不安が解けたようだと燈籠はほつとした。

「燈籠、お互い頑張ろう。それじゃ、また連絡するよ」

「ああ。また」

霧窪の顔は見えなくなり、水晶は光を失い、ただの緑色になつた。そろそろ寝る時刻だ。色々不安だが所詮、やらなければならぬこと。悩んでいても仕方ない。しかし、ただならぬ不安は払拭できなかつた。

何か起こる。そんな予感がする。無事に終わればいいが。燈籠は寝巻きに着替え寝床に入った。今宵の月は美しい、と彼は思った。

十月三日の行事、阿高山参拝、あるいは阿高山登り。毎年確實にあるわけではない。陰陽師達が今年は参拝に行かなくてはならないと占うと、決定されるものだつた。都の三大学舎である西京、それに富嶽、京帝の各学舎の生徒たちが、東に三十里ほど行つたところにある阿高山をを目指す。道は自由ではなく、指定された道を通らねばならない。道のほとんどは山道である。媼山、狼頭山や旧街道を通る。旧街道は現在ほとんど使用されていない状況だつた。魑魅魍魎の類が出るからだ。狼頭山には狼が多い。そこを越えると大太山の頂上を目指す。そして、これまた使われていない危険な天の橋を渡る。それからいよいよ阿高山に登り、頂上に奉つてある神々の祠にお参りをする。大体行つて帰るまでに一月はかかる苦行である。一つの学舎につき、八人の生徒が選ばれる。選ばれる生徒は教師達の判断ではなく、神々の意思で決まるものとされる。預言者たちのみが神の意思を感じることができ、それを学舎長に伝える。

八人で行動する、決められた道以外の道を行つてはならない。道は参拝を終えるまで引き返すことはできない。別の学舎の者達と交わつてはならない。参拝者以外の者が助力をしてはいけない。この五つは神々が出した規則であり、厳守せねばならないことだつた。命の危険がつきものの、恐ろしいこの儀式を喜ぶ生徒も、その親も、教員もいない。しかし、これらは必ず実行しなくてはならない約束だつた。守らなければ、京は滅びるかもしれない。それほど重大な行事であつた。三つの学び舎の生徒全二十四名のうち、一人でも阿高山の頂上にたどり着き、祠を参拝できれば凶事は回避できる。しかし、二十四名のうち途中で遁走を試みた者が出れば、その時点で呪いが発動する。しかし一つの成員がもはや続行不能の状態になつたとしても、他の成員が参拝することができれば、それで旅は終わりとなり、その年は成功となる。

もう一十数年以上も続けられているが、最も悲惨な年は死者が十八名でたときで、京学舎の生徒は二名しか残らなかつた。死者の多くが天の橋を渡ることなく死んでいった。この年は悲劇の年としてその年に学舎で教員をしていた者たちにとつては忌まわしき過去だつた。それ以来、さらなる対策が立てられることとなつた。二十四名全員が生きて帰れたこともある。奇跡というわけではなかつた。悲劇の年以降、死者の数は激減した。死者の数を全く無くすことが最終目標で、学舎の教員達はその対策も練つていた。誰もが安心して学べる学び舎にしたい、それが彼らの願いであり目的だつた。しかし悪霊がそれを許さなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4993z/>

---

参拝の旅

2011年12月16日23時48分発行